HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『本草和名』所載薬の漢名と和名について
Author(s)	武, 倩; 劉, 冠偉
Citation	研究論集, 18, 49（左）-61（左）
Issue Date	2018-12-26
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.18.l49
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72435
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_004_wu_liu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.18.l 49

『本草和名』所載薬の漢名と和名について

武　　倩・劉　　冠　偉

要　旨

『本草和名』（918 年頃）は日本現存最古の本草薬名辞典である。唐の勅撰本草『新修本草』を範にとり，『食経』等によって増補され，千種以上の薬用動植鉱物を収録している。漢名を見出し語に，下に別名，万葉仮名和訓，産地を注記する体裁をとっている。漢名に和名を対照させたことが本書の大きな特徴で，国語国文学や博物学など幅広い分野の研究に貢献できる。

本稿は，『本草和名』データベースに基づき，本書に記載されている薬用動植鉱物の漢名と和名について，考察を行った。考察に当たって，「松本書屋本」を底本に用いたが，「万延元年影写本」との間にある異文も合わせて提示した。

『本草和名』は本草書にある薬の性味・効能・採取時節などに関する記述を省略するものの，薬の名称をなるべく多く蒐集しようとする特色がある。この点について，先行研究では断片的に指摘されているものの，詳しい検討はこれまでになされていなかった。そこで本研究では，本書所載の漢名を見出し項目の漢名と項目内の漢名に分けて検討を行った。

まず，見出し項目を『新修本草』の編次に対照し，項目数を再計算した。そこから項目内の漢名を，データベースの活用によって，形式上分類・計量することが出来た。更に漢名列記の形式として「一名～」と「無標記」が最も多く，その他の形式には「並列式」「定義式」「部位別式」「地域別式」の四種類があることを指摘した。これらの成果は，本書における漢名列記の形式を分析した初めての研究として注目に値する。

本書に記載されている和名は，平安時代の語彙と音韻を反映する重要な語学資料である。関連する文献との比較調査によって，これからの国語学の研究に貢献することが期待される。本研究では，手始めとして，本書の和名に対しては，その注記率や万葉仮名使用状況を統計した。

今後は，本データベースの改良に励むと共に，他文献データベースとの連携を図り，調査を進展させたい。

一．はじめに

『本草和名』（918 年頃）は，醍醐天皇に仕えた医師深根輔仁によって編纂された日本現存最古の本草薬名辞典である。唐の勅撰本草『新修本草』を範にとり，『食経』等によって増補され，千種以上の薬用動植鉱物を収録している。漢名を見出し語に，下に別名，万葉仮名和訓，産地を注記している。漢名に和名を対照させたことが本書の大きな特徴で，国語国文学や博物学など幅広い分野の研究に貢献できる。

本稿は，『本草和名』データベース[1] に基づき，『本草和名』に記載されている漢名と和名の形式上の特徴を分析すると共に，基本となる研究データを提示する。考察に当たって，「松本書屋本」を底本に用いるが，「万延元年影写本」との間にある異文も合わせて示す[2]。

・「松本書屋本」：『松本書屋貴書叢刊』第 1 巻，松本一男編，谷口書店，1993 年刊
・「万延元年影写本」：無窮会専門図書館神習文庫蔵本の複写

二．漢名

『本草和名』の上巻冒頭には，漢名に関する凡例が記されている。この凡例は二つの部分に分かれており，前半部分は下掲のように，見出し項目の内訳を示している。

合一千廿五種
本草内薬八百五十種
諸家食経一百五種
本草外薬七十種【世用五種　稽疑三十三種　拾遺廿五種　新撰食経八種】

これによると，合計 1025 種の薬の中，「本草内薬」から 850 種，「諸家食経」から 105 種，「本草外薬」から 70 種（世用 5 種，稽疑 33 種，拾遺 25 種，新撰食経 8 種）を採録したという。

後半部分は下掲のように，見出し項目に対する別名の出典を説明している。

（凡例後半）
諸家食経　諸家音義　本草雑要訣　本草拾遺
大清経　神仙服餌方　養性要集　抱朴子内篇

1　武倩・劉冠偉（2017）を参照。
2　『本草和名』の諸本については，武（2013），武（2016）を参照。

本草稽疑　墨子枕中五行記　小品方　釋薬性
丹草口訣　薬訣　五金粉薬訣　鑒真
兼名苑　崔豹古今注　耆婆脉決経　范注方
葛氏方　本草疏　陶弘景注　蘇敬注
録験方　脚氣論　新方　廣利方　刪繁論
龍門百八方　新録単方　千金方　玄感傳屍方
以前諸書中薬別名皆抄出列於條下

「諸家食経」「諸家音義」などの出典名を列挙した上で，「以前諸書中薬別名皆抄出列於條下」（以上の諸書に見られる薬の別名を全て各条の下に抄出した）と記している。

凡例の内容を参考にして，具体例（例１・例２）から『本草和名』の体裁を見てみよう。

例１　「杜仲」項

（本草和名）

上十二 52 表６　杜仲　一名思仙一名思仲一名木綿【陶景注云折之多白絲】一名大戊【出兼名苑】杜仲者木精也【出録験方】又云山精【出神仙服餌方】和名波比末由美[3]

（新修本草）

杜仲　味辛，甘，平，温，無毒。主腰脊痛，補中益精氣，堅筋骨，強志，除陰下瘡湿，小便餘瀝，脚中酸疼痛不欲践地。久服軽身耐老。一名思仙，一名思仲，一名木綿。生上虞山谷，又上黨，及漢中。二月，五月，六月，九月採皮陰乾。畏蛇脱皮，玄参。

上虞在豫州，虞，號之虞，非會稽上虞縣也。今用出建平，宜都者。状如厚朴，折之多白絲為佳。用之，薄削去上甲皮，横理切令絲断也[4]。

「杜仲」は『新修本草』から採録された項目である。両書の内容を対照させてみると，『本草和名』にある「一名思仙一名思仲一名木綿」は『新修本草』の本文に由来し（一重下線部分を参照），「陶景注云折之多白絲」はその注（陶景注）に由来する（二重下線部分を参照）ことが分かる。

その後の「一名大戊」，「杜仲者木精也」，「又云山精」部分はその他の諸書（『兼名苑』『録験

[3] 『本草和名』の所在は松本書屋本による。「上十二 52 表６」は「上冊第十二巻 52 丁表６行目」を表す。「【　】」は小字双行を表す。

[4] 『新修本草』は本草図書刊行会所収の仁和寺本複製と岡西為人重輯のものを参看した。大字は『新修本草』の本文部分（太字は『神農本草経』由来）を，小字はその注を表す。句読点は筆者による。

方』『神仙服餌方』）に由来する。

例 2　「鯨」項

下十六 25 表 9　鯨　【其京反出崔禹】一名鯢一名鯤【音昆】一名魚伯一名海鰌一名麻竭【已上五名出兼名苑】和名久知良

「鯨」は『崔禹食経』から採録された項目である。『崔禹食経』が現存しないため，両書を比較することが出来ないが，割注によって「一名鯢一名鯤」及び「一名魚伯一名海鰌一名麻竭」部分は『兼名苑』によって付け加えられたと推測できる。

このように，『本草和名』は『新修本草』と『食経』等をベースにして項目を立てた上で，その他の諸書にある別名を付け加える形で形成されたものである。本草書にある薬の性味・効能・採取時節などに関する記述については省略するものの，薬の名称についてはなるべく多く蒐集するという特徴を持っている。

本章は第 1 節において，版本と写本の間の異文を示す。第 2 節と第 3 節において，『本草和名』データベースに基づき，見出し項目及び項目内の漢名の数を統計し，形式上の特徴を分析する。

1　諸本間の異文

筆者らが構築する『本草和名』データベースは，松本書屋本に基づいているが，万延元年影写本との間に見られる異文をも反映させる予定である。ただし漢名部分の異文は入力途中であるため，ここでは一部だけ例示することに止まる。

①　前項目との分離

本書では，形式上項目ごとに一行目が高く，二行目以降は一字下げて書写する形式をとっている。しかし，伝写の過程において，その法則が乱れていき，項目間の区切りが失われている箇所が見受けられる。例えば，次に示すような項目においては，万延元年影写本では前項目に続いて書かれているが，松本書屋本ではそれを訂正し，前項目と分離させている。

蒼石（上五 9 表 2）[5]，牛角鰓（下十五 7 裏 1），

珂（下十六 24 裏 5），蓼實（下十八 36 裏 8）

②　脱落項目の補入

万延元年影写本では，「烏古瓦」（上五 11 表 8）という項目が脱落しており，「烏古瓦」の注文は前項目の「白瓷瓦」（上五 11 表 7）に付されている。松本書屋本では，それを正し，「烏古瓦」を補入している。

[5] 所在は松本書屋本による。以降同じ。

③　脱字・空字の補入

松本書屋本は万延元年影写本に見られる脱字や空字を補っている[6]。次にその中の二例を挙げる（⇔の左は万延元年影写本，右は松本書屋本）。

雲母（上三３表３）：一名地　⇔　一名地涿

方解石（上五８裏９）：一名黄　⇔　一名黄石

2　見出し項目の漢名

『本草和名』凡例前半部分にある「本草内薬」というのは『新修本草』に収録されている薬のことである。『本草和名』の編次を『新修本草』に比較すると，表一に示しているように，第三～第十四巻の部分において，見出し項目の内訳は『新修本草』とほぼ一致している。第十五～第十九巻において，見出し項目には『新修本草』に加えて，『食経』から採録したものもある。末巻において，見出し項目は『新修本草』以外の出典から採録している。

また，『本草和名』は各巻の初頭に「第三巻　玉石上二十一種」のように，巻ごとの項目数を示している。しかし，本編で確認すると，実際の数とずれている場合が多い。岡西（1964）では関連する考証がなされており，それを参考にして実際の項目数を表一に掲載する。

表一　新修本草と本草和名の編次

巻別	新修本草	本草和名	
		巻首記述	実際の項目数
第一巻	序例上	×	×
第二巻	序列下	×	×
第三巻	玉石等部上品合二十二種	玉石上二十一種[7]	26
第四巻	玉石等部中品合三十種	玉石中三十種[8]	29
第五巻	玉石等部下品合三十一種	玉石下三十種[9]	31
第六巻	草部上品之上合四十種	草上四十一種[10]	40
第七巻	草部上品之下合三十八種	草上三十八種	38
第八巻	草部中品之上合三十七種	草中三十七種	37
第九巻	草部中品之下合三十九種	草中三十九種	39

6 「空字」とは，文字が脱落しているが，字数分のスペースが空いている。考証学者の森立之らは校正符号などを用いて，両本の異文を示しており，その詳細は武（2013），武（2016）を参照。

7 「二十二種」の誤記である。また，「五色石脂」を「青石脂」「赤石脂」「黄石脂」「白石脂」「黒石脂」の五種に分けているので，実際の項目数は 26 である。

8 「鐵」の次に「生鐵」が脱落しており，実際の項目数は 29 である。

9 「三十一種」の誤記である。

10 「四十種」の誤記である。

巻別	新修本草	本草和名	
		巻首記述	実際の項目数
第十巻	草部下品之上合三十五種	草下三十五種[11]	36
第十一巻	草部下品之下合六十七種	草下六十七種	67
第十二巻	木部上品合二十七種	木上三十七種[12]	26
第十三巻	木部中品合二十八種	木中二十八種[13]	30
第十四巻	木部下品合四十五種	木下四十五種[14]	43
第十五巻	獣禽部合五十六種	獣禽六十九種：本草五十六食経十三[15]	72
第十六巻	虫魚部合七十二種	虫魚類百十三種：本草七十二食経四十一	113
第十七巻	菓部合二十五種	菓四十五種：本草二十五食経二十	45
第十八巻	菜部合三十七種	菜六十二種：本草三十八食経二十四	62
第十九巻	米等部合二十八種	米穀卅五種：本草二十八食経七[16]	36
第二十巻	有名無用有合一百九十三種	有名無用　百九十三種	193
本草外薬	×	七十種：稽疑三十三・新撰食経八・拾遺二十五・世用四	70
総計	八百五十種	一千二十五種	1033

見出し項目の内訳を確認すると，次の七箇所に重複が見られる。

女萎（上六 12 裏 9），女萎（上八 32 表 4）
菰根（上十一 46 裏 9），菰根（下十七 33 裏 4）
羊乳（下十五 6 表 2），羊乳（下二十 46 裏 7）
石蜜（下十六 13 表 7），石蜜（下十七 30 裏 9）
芥（下十八 36 裏 2），芥（下二十 49 裏 1）
薫草（下二十 50 表 2），薫草（下外 52 表 6）
練石草（下二十 50 裏 1），練石草（下外 52 裏 1）

[11]「烏頭」の次に「烏喙」を立てており，実際の項目数は「三十六」である。
[12]「二十七」の誤記である。「松脂」の次に「松實」を立てており，「牡桂」の次に「桂」が脱落している。また，外観上「牡荊」項が前項目の「蔓荊」に吸収され，実際の項目数は「二十六」である。
[13]「桑根白皮」の次に「桑菌」と「赤鶏桑」を加えており，実際の項目数は「三十」である。
[14]「梓白皮」の次に「蘇方木」と「接骨木」が脱落しており，実際の項目数は「四十三」である。
[15]「人屎」の次に「人溺」と「糞」の二項目を立て，「狸骨」の次に「家狸」の一項目を，「豚卵」の次に「脂腿」「豚又有嬪」「猪」「猳猪肉」の四項目を，「鵁頭」の次に「山鶏」「鷓」「雲雀」などの十項目を立てている。その中から「食経十三」を引くと，四項目が増えている。一方，外観上「豹肉」項が前項目の「虎骨」に吸収されているので，実際は記述より三項目多い。
[16]「大豆」の次に「生大豆」を別項目として立てており，実際の項目数は「三十六」である。

これらの中，「菰根」（下十七 33 裏 4 ）は『七巻食経』からの増補である。「薫草」（下外 52 表 6 ）と「練石草」（下外 52 裏 1 ）は『本草稽疑』からの増補である。残りの四箇所は『新修本草』でも重複している。

3　項目内の漢名

『本草和名』凡例の後半部分では，見出し項目の漢名に対して，項目内にある漢名を「別名」と称している。しかし，詳細は後述するが，双方の関係は単なる「別名」とは言えないパターンが多く見受けられる。そのため，ここでは「別名」ではなく，「項目内漢名」と仮称する。

巻別項目内漢名の数は表二に示す通りである。本書には合計 1,033 項目があり，それに対して，項目内漢名は 3,591 個ある。従って，平均一項目当り 3.5 個の項目内漢名を持っている。第二十巻（有名無用）と本草外薬においては，項目内漢名の数が少なく，平均項目内漢名数は 1 を下回っているが，それ以外の巻においては，一項目当りには 3 個以上の項目内漢名を持っている。

表二　項目内漢名数の統計

巻別	項目数	項目内漢名数	平均項目内漢名数
第三～五巻　玉石	86	312	3.6
第六～十一巻　草	257	1,424	5.5
第十二～十四巻　木	99	410	4.1
第十五巻　獣禽	72	239	3.3
第十六巻　虫魚類	113	459	4.1
第十七巻　菓	45	199	4.4
第十八巻　菜	62	226	3.6
第十九巻　米穀	36	114	3.2
第二十巻　有名無用	193	151	0.8
本草外薬	70	57	0.8
総計	1,033	3,591	3.5

『本草和名』では，漢名を列記するに当たって，何種類かの形式をとっている。例 3 のように「一名」の後に漢名を並べるパターンもあれば，例 4 のように，直接漢名を挙げるパターン（「無標記」と仮称）もある。表三に示すように，この二種の形式が圧倒的に多く，合わせて全体の九割を占めている。

例 3　「石膽」項

上三 2 裏 9　石膽　一名畢石一名墨石一名基石【楊玄操音義作篡】一名銅勅一名立制止【出

薬訣】出備中国

例 4　「藍實」項

上七 21 表 6　藍實　木藍子【葉圓大】菘藍【為淀】蓼藍【不堪為淀】和名阿為乃美

表三　漢名列記の形式による統計

形式	別名数	割合
一名～（例 3）	2,860	79.6%
無標記（例 4）	592	16.5%
その他（表四）	139	3.9%
総計	3,591	100.0%

また，「一名～」や「無標記」の他には，下掲する例 5 ～例 8 のような形式も見られる。

例 5　「棘刺花」項

上十三 59 裏 5　棘刺花　【蘇敬注云即棘花】一名析蓂【楊玄操音上斯歴反下音覓】一名馬昫【楊玄操音其倶反】一名刺原又有棗針【蘇敬注云此冥在棗部】一名反刺【出兼名苑】

例 5 では，漢名「棗針」の前に「又有」という語句を冠している。これに類似するものには「又」，「又云」，「又云是」，「作」，「或作」，「即」，「一曰」などがある。後述する例 6 ～例 8 のパターンと区別するために，このパターンを「並列式」と仮称する。

例 6　「人参」項

上六 15 裏 2　人参　一名人衘一名鬼蓋一名神草一名人微一名土精一名血参一名黄糸一名玉精【已上三名出釈薬性】人参者薬精也【出范注方】一名人徼【出雑要訣】和名加乃尓介久佐一名尓己太一名久末乃以

例 6 では，『范注方』を引用して，「人参者薬精也」と記している。「～者～也」という形式で挙げた「薬精」が「人参」に含まれる要素や性質などを表わす名称であるならば，前掲の例 5 とは異なり，並列的なものではなく，定義的な要素を持っている。このパターンを「定義式」と仮称する。

例 7　「瞿麥」項

上八 29 裏 6　瞿麥　【仁謌音衢陶景注云子頗似麦故以名之】一名巨句麦【楊玄操音九懼反】

一名大菊一名大蘭根名紫蔵華名藁【已上二名出疏文】和名奈天之古

例 7 では，『疏文』を引用して，「根名紫蔵華名藁」と記している。「紫蔵」は「瞿麥」の根の名前で，「藁」は「瞿麥」の華の名前であると推測できる。このように，項目内漢名には，見出し項目の部位別の名称とされるものも見られる。類似するものには「皮名」，「樹名」，「葉名」，「子名」，「殻名」などが挙げられる。このパターンを「部位別式」と仮称する。

例 8　「麦門冬」項

上六 12 表 9　麦門冬　【陶景注云根似穬麦故以名之】秦名羊韮齊名愛韮楚名烏韮隠居本草作馬韮越名羊蓍【楊玄操音尸】一名禹葭【仁謂音家】一名禹餘粮【已上本條】一名禹芝一名虫寧藥一名忍冬一名忍□卜麦一名不死藥一名果一名濮壘一名隨脂楚名馬韮越名羊齊【已上十名出釈藥性】一名羊芥一名烏韮【出雑要訣】和名也末須介

例 8 では，『新修本草』や『釈藥性』を引用して，「秦名羊韮齊名愛韮楚名烏韮」，「楚名馬韮越名羊齊」と記している。「羊韮」，「愛韮」，「烏韮」（「馬韮」），「羊齊」は「秦」，「齊」，「楚」，「越」の各地域における「麦門冬」の名称であると推測できる。このパターンを「地域別式」と仮称する。

上記のように，表三にある「その他」をさらに「並列式」「定義式」「部位別式」「地域別式」の四種に大別することが出来る。その内訳は表四に示す通りである。

表四　「その他」の内訳

分類	形式	別名数
並列式（例 5）	又有～，又～，又云～，又云是～，作～，或作～，即～，一曰～など	45
定義式（例 6）	～者～也，～也，	40
部位別式（例 7）	「根・皮・樹・葉・華・實・子・殻など＋名」～	38
地域別式（例 8）	「地域＋名」～	13
総計		139

三．和名

本章は万延元年影写本と松本書屋本の間に見られる異文を示した上で，『本草和名』データベースに基づき，松本書屋本の和名注記および万葉仮名用字の実態について調査を行う。

1　諸本間の異文

万延元年影写本と松本書屋本の間では 16 項目の和名に相違が見られる。その詳細は次の通

りである（⇔の左は万延元年影写本，右は松本書屋本）。

① 単字の補入

昌蒲（上六 13 裏 6）：和名阿也久佐　⇔　和名阿也女久佐

□艹懐香子（上九 37 裏 6）：和名礼乃於毛　⇔　和名久礼乃於毛

蛇苺汁（上十一 46 裏 7）：和名美以知古　⇔　和名倍美以知古

敗夭公（上十一 47 裏 1）：和名多加佐乃也礼　⇔　和名多介加佐乃也礼

甑帯灰（上十一 50 裏 2）：和名古之和良乃波比　⇔　和名古之支和良乃波比

驢屎（下十五 10 表 7）：和名宇佐岐末　⇔　和名宇佐岐宇末

桑螵蛸（下十六 14 表 1）：和名於保知布久利　⇔　和名於保知加布久利

鯉魚（下十六 15 表 9）：和名比　⇔　和名古比

馬刀（下十六 24 表 2）：和名末乃加比　⇔　和名末天乃加比

苦菜（下十八 35 裏 1）：和名尓奈一名都波比良久々佐⇔和名尓加奈一名都波比良久々佐

鼷沙（下外 53 表 9）：和名加比古乃曾　⇔　和名加比古乃久曾

② 復合語一部の補入

秦艽（上八 25 裏 9）：和名都加利久佐一名波加利　⇔　和名都加利久佐一名波加利久佐

鶏頭實（下十七 29 表 9）：和名美都布々岐　⇔　和名美都布々岐乃美

③ 和名の追加

安石榴（下十七 32 ウ 4）：掲載なし　⇔　和名佐久呂

柑子（下十七 32 ウ 8）：掲載なし　⇔　和名加牟之

④ 衍字の削除

蘞菜（上九 37 表 3）：和名奈岐一名奈岐　⇔　和名奈岐

2　和名注記の統計

本書において，和名はすべての項目に付されているわけではない。和名注記のある項目数や和名注記の割合は表五の通りである。

巻別からみると，第三～五巻（玉石），第二十巻（有名無用），本草外薬を除くと，和名注記の割合は六割以上を占めている。合計からみると，本書は 1,033 種の薬物を収録しており，そのうち 586 種に和名が注記されている。

その内訳を見ると，

① 和名注記のある 586 の項目には，一項目に一つの和名，一項目に二つの和名，一項目に三つの和名，の三パターンがある。二つの和名を持つのは計 94 項目で，三つの和名を持つのは計 11 項目である。

表五　和名注記の統計

巻別	項目数	和名注記項目	和名注記割合
第三～五巻　玉石	86	21	24.4%
第六～十一巻　草	257	207	80.5%
第十二～十四巻　木	99	68	68.7%
第十五巻　獣禽	72	47	65.3%
第十六巻　虫魚類	113	93	82.3%
第十七巻　菓	45	37	82.2%
第十八巻　菜	62	57	91.9%
第十九巻　米穀	36	27	75.0%
第二十巻　有名無用	193	0	0.0%
本草外薬	70	29	41.4%
総計	1,033	586	56.7%

従って，延べ和名数（重複を含めた和名の総数）は 702 である。

②　また，同じ和名が複数の項目に出現する場合がある。

・二項目に出てくるのは，「乎止乎止之」赤箭（上六 11 裏 9）・鬼督郵（上七 25 裏 1），「於毛多加」澤蔫（上六 14 表 6）・鳥芋（下十七 31 裏 1）などの 35 語である。

・三項目に出てくるのは，「阿末奈」黄精（上六 13 表 4）・麻黄（上八 26 裏 8）・白薇（上八 30 裏 9），「以奴衣」蘇（下十八 37 裏 7）・假蘇（下十八 38 表 3）・香薷（下十八 38 表 6）の 2 語である。

従って，異なり和名数（重複を除いた和名の数）は 663 である。

3　和名の万葉仮名

本書にある和名は万葉仮名で記されており，当時の文字と音韻を反映している。その万葉仮名用字をまとめた一覧表が，全集本の提要に見られるほか，川瀬（1955）と築島（1981）でも掲載されている。しかし，下記に示すように，それらのいずれにも不備が見られる。

◆刊本の提要では「タ」に「大」，「ハ」に「巴」，「ヰ」に「委」が欠けている。

◆川瀬（1955）では「キ」に「木」[17]，「カ」に「迦」，「レ」に「禮」が欠けている。

◆築島（1981）では「キ」に「木」，「コ」に「己」，「マ」に「万」が欠けており，「ヰ」に該当する「委」を「ワ」に入れている。

[17]「木」を訓注の表記と認めているため，一覧表に加えていないという。

ここでは今回の調査結果を表六にまとめる。万葉仮名字母の右に出現頻数（延べ数）を示す。川瀬（1955）によれば上代特殊仮名遣い甲類・乙類の分別は本書では確認できず，清・濁表記の区別も殆どなされていないという。この二点の検証については今後の課題とし，本論では区別せずに表に挙げた。ア行のエ$_1$とヤ行のエ$_2$の分類については，小倉（2001）を参考にしている。

表六　万葉仮名用字及び出現頻度

ア	イ	ウ	エ$_1$	オ
阿：77	以：41 伊：4	宇：52	衣：18	於：47
カ	キ	ク	ケ	コ
加：193 迦：1	岐：144　支：2 木：1	久：175	介：28	古：60 己：1
サ	シ	ス	セ	ソ
佐：130	之：110	須：52	世：14	曽：23
タ	チ	ツ	テ	ト
多：68　太：7 大：1	知：60	都：106	天：11	止：40
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
奈：77	尓：38	奴：19	祢：50	乃：169
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
波：144 巴：1	比：113	布：60	倍：14	保：56
マ	ミ	ム	メ	モ
末：98 万：1	美：106 三：3	牟：29 无：4	女：34	毛：47
ヤ		ユ	エ$_2$	ヨ
也：46		由：9	衣：2 江：1	与：12
ラ	リ	ル	レ	ロ
良：88	利：61	留：26	礼：12 禮：1	呂：27
ワ	ヰ		ヱ	ヲ
和：10	為：15 委：1		恵：5	乎：24

四．おわりに

本稿は，『本草和名』データベースに基づき，本書に記載されている薬用動植鉱物の漢名と和名について，考察を行った。漢名を見出し項目の漢名と項目内の漢名に分けて検討し，後者を形式上分類・計量することが出来た。和名に対して，その注記率や万葉仮名使用状況を統計し

た。また，諸本間の異文も合わせて提示した。

今後は，本データベースの改良に励み，また，他文献データベースとの連携を図り，調査を進展させる所存である。

（ぶ　せい・りゅう　かんい・言語文学専攻）

参考文献

【論著】

岡西為人（1964）「關於復原新修本草之考察」『重輯新修本草』國立中國醫藥研究所，pp.27-39

小倉肇（2001）「「衣」と「江」の合流過程：語音排列則の形成と変化を通して」『國語學』52（1），pp.1-15

川瀬一馬（1955）「第三章：第五節　本草和名」『古辭書の研究』大日本雄辯會講談社，pp.70-76

築島裕（1981）「第一章：四　万葉仮名の襲用と変転 ── 九世紀以降 ──：音義・辞書の中の和訓」大野晋，丸谷才一編『日本語の世界 5　仮名』中央公論社，pp.80-90

築島裕（1987）「『本草和名』の和訓と『医心方』の万葉仮名和訓」『国書逸文研究』20，pp.3-12

武倩（2013）「『本草和名』の諸本に関する一考察 ── 万延元年影写本と全集本との関係を中心に ──」『訓点語と訓点資料』（131）pp.43-52

武倩（2016）「松本書屋本『本草和名』について」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』（15）pp.51-60

武倩・劉冠偉（2017）「『本草和名』データベースの構築に向けて」第 23 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」発表論文集

【テキスト】

『新修本草』（巻第四・五・十二・十五・十七・十九）本草図書刊行会，1936-1937 年刊

『重輯新修本草』岡西為人重輯，國立中國醫藥研究所，1964 年刊

付記

本稿は武倩と劉冠偉の共同執筆によるものである。武倩は武田科学振興財団「杏雨書屋研究奨励」の支援を受けている。

平素は，池田証壽先生から熱心な御指導を頂いている。第 23 回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」で，川口洋先生（人文系データベース協議会議長），大西拓一郎先生（国立国語研究所教授）から貴重なご意見を頂戴した。この場を借りて，心より感謝申し上げたい。